

## 要旨

### 『ハリー・ポッター』シリーズにおける正当化された奴隷労働 —屋敷しもべ妖精の幼児性—

高橋 優佳

J・K・ローリング (J. K. Rowling, 1965-) の『ハリー・ポッター』シリーズ (*Harry Potter series*, 1997-2007) に登場する「屋敷しもべ妖精」(House-elves) は、魔法界で奴隷労働を強いられている魔法生物である。本作の物語展開において鍵を握る存在でもある屋敷しもべ妖精が未熟な幼い子どもを想起させ、哀れを誘う存在として描かれている点は、しもべ妖精の描写を考察する上でも非常に重要であり、特筆に値する。本稿は屋敷しもべ妖精の階級や労働状況、しもべ妖精の幼児性に着目しながら、魔法界における「正当化された」労働搾取の問題を検討することを目的としている。

## Abstract

### The Justified Slave Labour in the *Harry Potter* Series: The Childishness of House-Elves

Yūka TAKAHASHI

'House-elves' are the magical creature who are enslaved by their masters (witches and wizards) in wizarding community, in *Harry Potter* series (1997-2007) by J. K. Rowling (1965-). Though House-elves have very important roles in the story, they often show childish behaviours and look pitiful. This paper focuses on the class, the condition of employment and the childishness of House-elves, and considers House-elves as the symbol of the 'justified' slave labour by making them look like small children who need to be under 'the protection' of their masters.

# 『ハリー・ポッター』シリーズにおける

## 正当化された奴隷労働

### —屋敷しもべ妖精の幼児性—

高橋 優佳

#### はじめに

本稿は、J・K・ローリング(J. K. Rowling, 1965-)の『ハリー・ポッター』シリーズ(*Harry Potter series*, 1997-2007)<sup>1</sup>に登場し、魔法界で奴隷労働を強いられている「屋敷しもべ妖精」<sup>2</sup>(house-elf)という種族に焦点を当て、階級や言動、労働状況を幼児性に着目しながら考察し、しもべ妖精の魔法界における労働搾取の問題を検討することを目的としている。

まずは本作のあらすじを確認したい。赤ん坊の頃に両親を亡くし、伯母夫妻に虐げられて育った主人公のハリー・ポッター(Harry Potter)は、11歳の誕生日に自分が魔法使いであること、両親は闇の帝王ヴォルデモート卿(Lord Voldemort)に殺害されたことを知る。ハリーはグリフィンドール(Gryffindor)、ハッフルパフ(Hufflepuff)、レイブンクロー(Ravenclaw)、スリザリン(Slytherin)という4つの寮からなる「ホグワーツ魔法魔術学校」(Hogwarts School of Witchcraft and Wizardry)での学生生活を通して、校長のアルバス・ダンブルドア(Albus Dumbledore)や親友のロン・ウィーズリー(Ron Weasley)、ハーマイオニー・グレンジャー(Hermione Granger)をはじめとした周囲の者たちに支えられながら、闇の帝王に対峙するべく、様々な困難を乗り越え成長していく。

屋敷しもべ妖精は本作第2巻から登場し、ハリーたちと関わり合っていくが、本稿はその中でも数々の場面でハリーを手助けしてきたドビー(Dobby)や、主人から理不尽に解雇されてしまう女性の屋敷しもべ妖精ウィンキー(Winky)、年老いたしもべ妖精のクリーチャー(Kreacher)を中心に考察する。

ここで、屋敷しもべ妖精に関する先行論等の見解をいくつか紹介したい<sup>3</sup>。菱田信彦は、屋敷しもべ妖精が権利獲得や待遇改善にはほとんど興味を示さないものの、主人から「親切にされること」だけを強く望む「ゆがんだ」存在として描かれてい

ると指摘している（菱田、74）。小谷真理は「ハウスイルフ」という呼称が「ハウスイフ」に近い響きを持つことから「主婦や家政婦さんの仕事をしている妖精」と記しており（小谷、72-74）、伊達桃子は屋敷しもべ妖精の無償労働を「主婦」の「奴隷的労働」だと述べている（伊達、160）。

本作では実際に“slave”や“enslavement”など、しもべ妖精の奴隷労働を強調する表現が用いられている。寺島久美子はクリーチャーの名前が「隷属者」や「奴隷」などの意味も持つ“creature”の同音異義語であることから、屋敷しもべ妖精を「純血主義者に隷属し、支配されている生き物」と記し（寺島、159。純血主義者については後述する）、ブリッチャン・ケアリー（Brycchan Carey）はハーマイオニーが屋敷しもべ妖精のために設立した「しもべ妖精福祉振興協会」（the Society for the Promotion of Elfish Welfare、通称 S.P.E.W.）を取り上げ、18-19 世紀の黒人奴隷と奴隷保有者の関係との類似性を考察している（Carey, 169-70）。

本作を新自由主義と多文化主義の観点から論じる三浦玲一は、屋敷しもべ妖精を「奴隷」から「低賃金労働者」となり、「新自由主義」に吸収された者として捉え（三浦、42）、坂田薫子は、魔法によって日常生活の雑用を行える魔法界では「人間の召使い」は必要ではなく、「いわゆるプロレタリア階級（無産者階級）は存在し得ない」ため「労働者階級を象徴する存在は他の魔法種族」となり、しもべ妖精がその役割を担っていると述べた上で、ハーマイオニーが行おうとした屋敷しもべ妖精の解放運動と「新労働党政権」との類似性を指摘している（坂田、78；85）。

屋敷しもべ妖精の階級に関しては、先行論の見解を念頭に置きつつ、魔法政府機関の「魔法省」（Ministry of Magic）の「魔法生物規制管理部」（The Department for the Regulation and Control of Magical Creatures）に、「屋敷しもべ妖精転勤室」（the Office for House-Elf Relocation）という部署があることや、この事実によってしもべ妖精の業務には「転勤」という概念が存在することに注目する。また、無給労働が魔法界の「常識」とされる屋敷しもべ妖精だが（GF, 414）、実際には賃金や休暇を得る権利を有していることを考慮し（GF, 415）、本稿ではしもべ妖精の奴隷的労働には留意しつつ、労働者階級の者として考察する。

以上のように、先行論では階級社会や奴隷制、ジェンダー的観点からの議論は行われているが、屋敷しもべ妖精の幼児性に焦点を当てた先行論は、現段階では確認されていない。しかし、本作の物語展開において鍵を握る存在でもある屋敷しもべ妖精が未熟な幼い子どもを想起させるように強調して描かれている点は、しもべ妖精の描写を考察する上でも非常に重要であり、特筆に値する。そこで本稿は、ヴォルデモート卿が軽んじてきた、純粋さを象徴する存在についてダンブルドアが語る中で、‘Of house-elves and children’s tales, of love, loyalty and innocence, Voldemort

knows and understands nothing.’ と、屋敷しもべ妖精を筆頭に挙げていることや (*DH*, 568)、年老いた屋敷しもべ妖精のクリーチャーが、“Then he pushed himself into a sitting position again, rubbing his knuckles into his eyes like a small child.” (*DH*, 164) と描写されている点に注目する。その上で、先行論では論じられてこなかった屋敷しもべ妖精の「幼児性」にも焦点を当て、作者のローリングがしもべ妖精を意図的に幼い子どもに見えるようにして描いていることの意味を検討していく。

## 1. 屋敷しもべ妖精と魔法界の階級制度

まずは屋敷しもべ妖精という種族について説明したい。屋敷しもべ妖精は、小柄で基本的に禿げ頭、コウモリのような長い耳とテニスボール大の目を持ち、甲高い声や、強い魔力を持つ魔法族が入りできないような場所にも独自の魔法で進入できる点などが特徴として挙げられる (*DH*, 161)。また、ドビーの ‘Dobby will serve the family until he dies, sir ...’ という台詞にも示されているように (*CS*, 20)、屋敷しもべ妖精は衣服を与えられて解雇（解放）されない限り、「一生その家族のために奴隷のように奉仕する妖精」であることが分かる（寺島、579）。屋敷しもべ妖精を雇えるかどうかは、魔法界におけるその家の経済状況や階級を示しており、ロンの兄ジョージ (George) によれば、屋敷しもべ妖精は魔法族の旧家で金持ちの家に雇われているという。ウィーズリー家に関しては「純血」 (pure-blood) と称される生粋の魔法族の家系だが、屋敷しもべ妖精を雇うための経済条件を満たしていないことが、‘Mum’s always wishing we had a house-elf to do the ironing,’ と言いながらも、‘But all we’ve got is a lousy old ghoull in the attic and gnomes all over the garden. House-elves come with big old manors and castles and places like that, you wouldn’t catch one in our house ...’ と語るジョージの台詞から確認できる (*CS*, 36)。

また、屋敷しもべ妖精を雇用できるのは主に純血の魔法族とされているが、第6巻以降は魔法族の父と「マグル」 (Muggle：非魔法族) の母との間に生まれた「半純血」 (half-blood) のハリーがクリーチャーの主人となったことから、純血の魔法族のみがしもべ妖精の主人になるわけではないことが分かる (*HBP*, 55)。ちなみに、しもべ妖精の忠誠心は絶対的なものではなく、自分に対して親切心と敬意を示す者に対しては主人か否かを問わず忠誠を誓う傾向にあり、仕える屋敷に完全に縛り付けられているわけでもないことが、後述するが主人に隠れて屋敷を抜け出していたドビーやクリーチャーの行動や、主人ではないが恩人のハリーを手助けしようとするドビーの姿勢から確認できる。

屋敷しもべ妖精に関して最も特徴的なのは、自分たちのことについて話す際に用

いる、‘house-elves has’ や ‘We has’、 ‘We is’ などの言葉遣いである。文法的に正しく表現するならば、それぞれ ‘house-elves have’ や ‘We have’、 ‘We are’ となる。この言葉遣いはまず、屋敷しもべ妖精が自分たちを一つの集合体と考えていることの表れとして解釈できる。同時に、しもべ妖精の境遇を問題視するハーマイオニーが ‘they’re uneducated and brainwashed!’ と語る台詞から (GF, 263)、この独特の言葉遣いには、しもべ妖精が学問や教養、判断力を培うための教育を受けずに労働している事実が示されていると言えよう。

続いて、屋敷しもべ妖精の魔法界での社会的地位を確認したい。本作の階級構造がイギリスの階級社会の影響を受けていることは先行論でも指摘されている(板倉、56；坂田、72)。まず、魔法族は主に「純血」や「半純血」、非魔法族出身者を意味する「マグル生まれ」(Muggle-born)、そして魔法族に生まれながら魔力を持たない「スクイブ」(Squib)に分類されており、他には狂暴な巨人族を両親のどちらかに持つ半巨人(Half-giant)や、満月の夜に狂暴な狼に変身する人狼(werewolf)などが存在する。マグル生まれ以降に挙げた者たちは魔法界では差別の対象となり、魔法が使えないスクイブが魔法族の最下層として描かれている。こうした区別が基本的に生粋の魔法族であることを鼻にかける純血主義者によって行われている点は念頭に置きたい。

次に、屋敷しもべ妖精のような魔法生物は「ヒトたる存在」(Being)や「動物」(Beast)、「霊魂」(Spirit)に分けられている。ホグワーツの指定教科書『幻の動物とその生息地』(*Fantastic Beasts & Where to Find Them*)の著者であるニュート・スクャマンダー(Newt Scamander)によれば、屋敷しもべ妖精や小鬼など、二足歩行で「魔法社会の法律を理解するに足る知性を持ち、立法に関わる責任の一端を担うことのできる生物」は「ヒトたる存在」として分類されている(Rowling, *Fantastic Beasts & Where to Find Them*, xxii, Introduction)。しかしながら、魔法使いと屋敷しもべ妖精の関係性が実際には隔てられていることが以下の引用から分かる。魔法省には、魔法族や屋敷しもべ妖精の像が立った、「同胞の泉」(The Fountain of Magical Brethren)と呼ばれる噴水がある。

Halfway down the hall was a fountain. A group of golden statues, larger than life-size, stood in the middle of a circular pool. Tallest of them all was a noble-looking wizard with his wand pointing straight up in the air. Grouped around him were a beautiful witch, a centaur, a goblin and a house-elf. The last three were all looking adoringly up at the witch and wizard. (OP, 117)

この彫像は屋敷しもべ妖精や小鬼 (Goblin)、ケンタウルス (Centaur) などの「ヒトたる存在」<sup>4</sup>や「動物」<sup>5</sup>が、魔法族より低い身分であることを示すような構造で、「同胞」と称するには程遠い。また、彫像の中で同じ「魔法族より下の存在」として示されている小鬼とケンタウルスだが、厳密に言えば屋敷しもべ妖精とは社会的地位が異なっている。例えば、小鬼は魔法界の金融機関であるグリングotts銀行 (Gringotts Wizarding Bank) を小鬼だけで運営し、責任ある立場で仕事をしており、ケンタウルスも「動物」に分類されてはいるが、第5巻以降は「占い学」(Divination) の授業を担当している (OP, 527)。それに対し、屋敷しもべ妖精は職場で責任者となることも、教師となることもない。また、人狼や半巨人、靈魂も教師になることは可能であり、スクイブは教員にはなれないが、ドビーがホグワーツの管理人でスクイブのアーガス・フィルチ (Argus Filch) を、'Mr Filch' と敬称を付けて呼んでいることから (OP, 343)、彼は屋敷しもべ妖精よりは上の立場にあることが分かる。

屋敷しもべ妖精のさらなる特徴として、古い枕カバーのような布を身に着けていることが挙げられる。ドビーはそのポロ布について、'Tis a mark of the house-elf's enslavement, sir.' と語っている (CS, 193)。屋敷しもべ妖精が着ている「服」は、奴隷のごとく使役される者としての証なのである。また、ドビーはヴォルデモート卿の最盛期における屋敷しもべ妖精の境遇について、以下のように語る。

'If he [Harry Potter] knew what he means to us, to the lowly, the enslaved, us dregs of the magical world! Dobby remembers how it was when He Who Must Not Be Named was at the height of his powers, sir! We house-elves were treated like vermin, sir! Of course, Dobby is still treated like that, sir,' (CS, 194)

引用から、当時の屋敷しもべ妖精は「害虫」扱いされていたことが分かり、屋敷しもべ妖精は魔法界の階級構造の中で最も低い身分に位置付けられていることが明らかとなる。しもべ妖精が魔法界で長年虐げられてきたことについては、ダンブルドアが後に「同胞の泉」について 'the fountain [...] told a lie.' と語り、'We wizards have mistreated and abused our fellows for too long,' と言及する台詞や (OP, 375)、屋敷しもべ妖精や小鬼が「ヒトにあらざる生物」(non-human creature) と称され、杖の所持や使用を禁じられていること (GF, 148-49)、ホキー (Hokey) という女性の屋敷しもべ妖精が、「屋敷しもべ妖精だから」という理由だけで犯人扱いされた冤罪事件からも確認できる (HBP, 410)。本作では魔法生物愛好家としても有名で、同じ被差別者でもある、ホグワーツの番人兼「魔法生物飼育学」(Care of Magical Creatures) の教師で半巨人のルビウス・ハグリッド (Rubeus Hagrid) が、屋

敷しもべ妖精の不遇に関しては興味を示さず黙認している点にも留意したい。

## 2. 屋敷しもべ妖精と幼児性

第2節では屋敷しもべ妖精の幼児性を、3人のしもべ妖精の描写を中心に検討する。まずは、ハリーが魔法界で初めて出会う屋敷しもべ妖精のドビーである。彼は罪悪感や不安を覚えると、‘Bad Dobby! Bad Dobby!’と叫び、自分の頭を殴りつけて己を罰するような言動を度々見せていた (CS, 20)。これはドビーが元主人で純血主義者のルシウス・マルフォイ (Lucius Malfoy) たちから日常的に虐待や脅迫など恐怖で支配されていたことや、ヴォルデモート卿最盛期の屋敷しもべ妖精への排斥行為の深刻化が起因していると解釈できる (CS, 361; 193)。

しかしドビーは、自分の意志でマルフォイ邸を一時的に離れ、自分たち屋敷しもべ妖精にとって救世主となるであろうハリーの元を度々訪れ、自由になりたいという思いから、屋敷しもべ妖精が自由になるための条件をハリーに伝える (CS, 20; 193)。第2巻終盤では、ハリーの協力を得てマルフォイ氏を出し抜き、遂にマルフォイ家から解放される (CS, 362-63)。彼はそれから丸2年間、新たな就職先を探す旅をするが、解雇された屋敷しもべ妖精の再就職は困難な上に、彼が給金を要求したために受け入れ先が見つけれずじまいにいた。屋敷しもべ妖精は無給労働が「常識」で、大半のしもべ妖精自身も賃金を得ることは恥ずべきことだと考えているのである (GF, 414)。ドビーは最終的に、第4巻の中盤でハリーのいるホグワーツ城を訪ね、ダンブルドアの下で、週に1ガリオン<sup>6</sup>の給料と月に1日の休暇を条件に働き始める (GF, 413-14)。その後は恩人のハリーを手助けし続け、最期は皮肉にもかつての主人であるマルフォイ家の親族の手にかかって命を落とす (DH, 385)。

次に、第4巻で登場する女性の屋敷しもべ妖精ウィンキーについて検討したい。ウィンキーは高所恐怖症だが“a good house-elf”であろうとし、‘House-elves does what they is told.’と考え、(彼女の恐怖症を認知している) 主人のバーティ・クラウチ (Barty Crouch) からの命令であれば、高所でも必死に使命を果たそうとしていた (GF, 112)。しかし、彼女は第4巻で起こるヴォルデモート卿関連の事件で濡れ衣を着せられ、拳句の果てにはクラウチ氏に強制解雇されてしまう (GF, 155)。

ウィンキーはその後、ドビーに連れられてホグワーツ城で働くことになるが、他のしもべ妖精に溶け込むことも、代々仕えてきたクラウチ家から解雇されたという現実を受け入れることもできず、泣き喚いて痲癩を起していた。彼女は悪いのは解雇された自分自身だと考え、精神的ショックからアルコール依存症に陥る (GF, 583)。その後、クラウチ氏が何者かによって殺害され、終盤には第4巻で起きた一

連の事件の真犯人が、ヴォルデモート卿の手下となったクラウチ氏の息子であることが判明するが、ウィンキーは最後まで彼のことを擁護し続けていた (*GF*, 748)。最終的にクラウチ氏の息子は処刑され、ウィンキーは真の意味でクラウチ家という主人を失うこととなる。彼女は第5巻以降登場しないものの、後にドビーが ‘Winky is still drinking lots, sir,’ と語る台詞により、彼女のアルコール依存症の深刻化が示唆されている (*OP*, 342)。

次に取り上げるのは、ハリーの名付け親で父ジェームズ (James) の親友でもあるシリウス・ブラック (Sirius Black) に仕えていた、年老いた屋敷しもべ妖精のクリーチャーである。彼が仕えていた純血主義者のブラック家では、「屋敷しもべ妖精が年老いて、お茶の盆を運べなくなったら首を刎ねる」という伝統があり、壁には歴代のしもべ妖精の首が飾られている (*OP*, 105)。さらには彼の野望が「首を切られて、母親と同じように楯に飾られること」だという点から (*OP*, 72)、彼の一族が代々、ブラック家に仕えていることも判明する。それ故に、彼には差別主義的な感覚が根付いており、マグル生まれであるハーマイオニーを「穢れた血」(Mudblood) という差別用語で蔑んでいた (*OP*, 100)。また、シリウスはブラック家で最後の主人だが、彼は傲慢で差別的な家族や、そこに長年仕えるクリーチャーのことを嫌悪していたため (*OP*, 375)、クリーチャーは生前に自分を可愛がってくれていた、シリウスの亡き母や弟など、他のブラック家の者たちを慕っていた。このことは、シリウスが処分したはずの家族写真や遺品がクリーチャーの寝床に収集されていたことや、彼がシリウスの亡き父の古いズボンを抱きしめていたことから確認できる (*OP*, 445 ; 108)。遺品の回収をシリウスに阻止された際には、痲癩を起して泣き喚き、シリウスを罵っていた (*OP*, 108)。

クリーチャーに関して特筆すべき描写は、彼の寝床にある、使い古された臭くて汚らしい毛布である (*OP*, 445)。この毛布は作中で度々登場するため彼の愛用品と推察されるが、クリーチャーの毛布は後に、敬愛するブラック家の遺品を包み込んで護るといふ、彼にとって重要な役割を果たす (*DH*, 165)。このことから、彼の毛布は就寝目的だけに使用されるものではなく、主に乳幼児期の子どもが特別の愛着を寄せる「安心毛布」(security blanket : 廣淵、127)<sup>7</sup>を連想させる形で描かれていることが分かる。

主人のシリウスに無下にされ続けたクリーチャーは、第5巻の中盤で彼を裏切り、ヴォルデモート卿の手下で自分に対し親切に接してくれるマルフォイ家の元を訪れ密偵となる (*OP*, 732)。このことが結果的にシリウスを死に追いやり、クリーチャーの身柄は第6巻以降、シリウスの遺言でハリーに引き取られ、彼はハリーの命令によりホグワーツで働き始める (*HBP*, 55)。



ここまで、3人の屋敷しもべ妖精の言動を中心に検討してきたが、自分を虐げる主人の意に背く行動をとったドビーやクリーチャーに対し、ウィンキーは自分に酷い仕打ちをしてきた主人に変わらぬ忠誠心を示していた。主人への忠誠心に関しては相違があるものの、3人とも前の主人から精神的・物理的虐待を受けていた他、それぞれ自傷行為や癩癩、毛布への愛着など、幼い子どものような言動が共通して見受けられる。こうした言動は3人に限った話ではなく、基本的に多くのしもべ妖精が、感情の起伏が激しく、時には制御が効かない精神的に未熟な一面を見せている(GF, 582-86)。このことから、屋敷しもべ妖精は全体的に幼い子どもを想起させるようにして描かれていることが分かる。その中でも、本稿序盤で言及したように、年老いたクリーチャーを小さな子どもの特徴を持った形で強調して描写することで、屋敷しもべ妖精が未熟で幼い子どものような存在であることを印象付けていると言えよう。

### 3. 屋敷しもべ妖精と労働搾取

第3節では、屋敷しもべ妖精の労働搾取について具体的に考察する。まずは第1節で触れた、屋敷しもべ妖精が教育を受ける機会を妨げられ、労働に搾取された者であることを示唆するハーマイオニーの台詞を裏付けるべく、1920年代を舞台にしたスピンオフ映画『ファンタスティック・ビースト』シリーズ(*Fantastic Beasts series*, 2016-)について言及したい。当時の屋敷しもべ妖精は、杖磨きやパーテナー(WFT, 39; 191)、窓ふきやサーカス団の調教師などの業務を担っていた(CG, 17-33; 82-92)。中でも注目すべきは、当時のアメリカ魔法界の新聞、*The New York Ghost*の広告欄である。“The New York Academy of House-Elf Training”という、屋敷しもべ妖精の訓練学校が紹介されている広告には、窓拭きをする屋敷しもべ妖精のイラストと共に、“THE NEW YORK ACADEMY OF HOUSE-ELF TRAINING”、“The No. 1 School!”、“WASHING, CLEANING, COOKING, DARNING, PRESSING, BAKING”、“*Meticulous Reputation!*”、“Expert TRAINING: *Sharpen up your House-Elf for an orderly, ship-shape household!*”、“NO MORE DODGING THE DUST!”などの宣伝文句が書き連ねられている(Bergstrom, 52. 下線は引用者)。広告の宣伝文句で特筆すべきは、“your House-Elf”という表記であり、この表記は訓練学校の宣伝対象が屋敷しもべ妖精本人ではなく雇用主であることを示している。屋敷しもべ妖精の境遇の歴史を調査したハーマイオニーが‘Elf enslavement goes back centuries.’と述べていることから(GF, 247)、当時のしもべ妖精も主人の支配下で無給労働をしていたことは明白である。以上の点からこの広告は、屋敷しもべ妖精が受けていた

教育は、あくまでも労働力として必要な技能を習得するためのものであり、教養や正しい判断力を身につけるための教育ではなかったことを示す、重要な証拠として提示できるだろう。

続いて、1990年代の屋敷しもべ妖精の労働内容を、ホグワーツ城を例に確認したい。ホグワーツの大広間では、テーブルに置かれた皿の上に山盛りの食べ物とデザートが魔法で現れるが、これらは全て屋敷しもべ妖精が行っている。しもべ妖精は普段、厨房で全職員や生徒の食事を三食分準備し、夜間には暖炉の管理や城中の掃除 (*GF*, 201)、寝室のシーツの取り替えなどを行っている (*GF*, 263)。また、屋敷しもべ妖精は“a disposable creature”として毒見係や実験台としての役割を担わされることもある (*HBP*, 454 ; *DH*, 160)。こうした労働は前述のように無給で行われており、しもべ妖精が主人に対して心からの忠誠を誓っている場合は過酷な労働内容でも張り切ってこなしているように描かれている点には留意したい。加えて、屋敷しもべ妖精が余暇の概念を持っていないことが、ウィンキーの‘House-elves is not supposed to have fun’ という台詞や (*GF*, 112)、賃金や休暇を望むドビーを他のしもべ妖精が軽蔑する様子に示されている (*GF*, 414-15)。

上記のような屋敷しもべ妖精の意識を「改革」し、奴隷労働から「救済」するためにハーマイオニーが設立したのが、「屋敷しもべ妖精福祉振興協会」である (*GF*, 247)。彼女は第4巻でウィンキーが登場した際に、初めて屋敷しもべ妖精という種族に出会い、魔法界における屋敷しもべ妖精の不遇を目の当たりにし、それに対し策を講じようとしなない社会の実情に憤りを感じる。ハーマイオニーの当初の目的は、屋敷しもべ妖精に正当な報酬を与え法的立場を改善することであったが (*GF*, 247)、マルフォイ家から自由の身となったドビーの生き方に感銘を受けた彼女は、次第にしもべ妖精を奴隷労働から自由に関心を持ち始める。このことは、内容が徐々に過剰化するハーマイオニーの活動を、ロンが‘What are we now, then, the House-Elf Liberation Front?’ と揶揄する台詞からも確認できる (*GF*, 410)。

しかしながら、ロンのように魔法界で生まれ育った者のみならず、屋敷しもべ妖精自身も‘house-elves has no right to be unhappy when there is work to be done and masters to be served.’ と考えているため (*GF*, 585)、ハーマイオニーの活動について好意的な態度を示すことはなかった (*GF*, 291-92)。しかし彼女は、その後も根気強く屋敷しもべ妖精の解放運動に尽力し、第5巻では自身が所属するグリフィンドール寮の塔内の至る所に帽子や靴下などの衣服を隠し、しもべ妖精たちがそれらを掃除中に拾って自由の身になれるよう仕向ける (*OP*, 230-31)。ところが、衣服を与えられること（職務を解かれること）を望まない屋敷しもべ妖精たちは彼女の作戦に気付き、侮辱されたと感じてグリフィンドール塔の清掃業務を放棄してしまう

(OP, 341-42)。結局のところ、彼女の活動はその後、作中では大きな進展を見せることはなかった。

屋敷しもべ妖精がハーマイオニーを疎んじていたのに対し、アルバス・ダンブルドアへの態度は異なっていた。このことが、第1節で引用した魔法省にある小鬼と屋敷しもべ妖精の彫像が見せた行動に示されている。2つの像はダンブルドアが魔法省に現れた際、彼に向かって拍手を送ったのである(OP, 721)。ドビーもまた、ダンブルドアをヴォルデモート卿に比肩する存在としても高く評価しており、 Hogwartz で働き始めてからは彼に忠誠を誓うことを心に決めていた(GF, 417)。ダンブルドアはドビーやウィンキーのような身寄りのない屋敷しもべ妖精にも手を差し伸べる姿勢を示している。屋敷しもべ妖精が純粹無垢な存在であることを示唆する彼はまた、シリウスを裏切り死に至らしめたクリーチャーについて ‘he is to be pitied.’ と述べ、しもべ妖精に親切心と敬意を表することの重要性を説いている(OP, 733)。一見すると、屋敷しもべ妖精の待遇改善の鍵はダンブルドアが握っているように解釈できる。しかしながら、結局は彼も他の魔法族と同様、屋敷しもべ妖精を「本人の意向を尊重して」無給労働させながら「保護する」という形に落ち着いており、労働問題の根本的解決には至っていない。

ハーマイオニーの解放運動やダンブルドアの慈善の精神が中途半端な形で描かれている要因を検討するべく、2005年に行われた会見で作者のローリングが発した、 ‘The house elves is really for slavery, isn't it, the house elves are slaves, so that is an issue that I think we probably all feel strongly about enough in this room already.’ という言葉に注目したい(CBBC News)。この言葉はドミニク・チータム(Dominic Cheetham)も言及しているが(チータム、159)、ローリングが今後、屋敷しもべ妖精の問題を掘り下げていくつもりがないことを示唆している。また、本稿序盤で「屋敷しもべ妖精転勤室」について触れたが、P・グレゴリー卿(Sir P. Gregory)は、かつてこの部署に勤務していたニュート・スキヤマンダーが暇を持って余っていたという事実から、一見屋敷しもべ妖精を救済する機関のように見えるこの部署は、実際は名ばかりで、魔法族は屋敷しもべ妖精の奴隷制度を廃止する気などなく、「屋敷しもべ妖精の解放は机上の空論」だと指摘している(グレゴリー、54)。

以上の点を踏まえると、本作で屋敷しもべ妖精を取り巻く問題が描かれながらも、実際には進展を見せることはなく、ハーマイオニーやダンブルドアが展開した救済措置行動が表面的で形ばかりの印象を与えている背景には、作者のローリング自身が屋敷しもべ妖精の労働問題や解放運動は本作の中で十分に描いたと自負していることが起因していると解釈できるのである。

## おわりに

以上のようにして、本稿は『ハリー・ポッター』シリーズにおける屋敷しもべ妖精の幼児性に焦点を当て、しもべ妖精の労働搾取の問題を検討した。作中で屋敷しもべ妖精を、幼い子どものように未熟で保護が必要な、衰れを誘う存在として印象付けることで、魔法界に生きる魔法族のみならず、作者のローリング自身もまた、屋敷しもべ妖精の労働搾取を「しもべ妖精が路頭に迷わぬよう保護するために必要な策」として正当化していると言えよう。それは同時に、魔法族や作者が屋敷しもべ妖精を不完全な存在と見なしていることを意味するのではないだろうか。

## 注

- 1 『ハリー・ポッター』シリーズにおける固有名詞は松岡佑子訳に準ずる。各題名の表記は、*Harry Potter and the Chamber of Secrets*(1998)はCS、*Harry Potter and the Goblet of Fire*(2000)はGF、*Harry Potter and the Order of the Phoenix*(2003)はOP、*Harry Potter and the Half-Blood Prince*(2005)はHBP、*Harry Potter and the Deathly Hallows*(2007)はDH、*Fantastic Beasts and Where to Find Them*(2016)はWFT、*Fantastic Beasts: The Crimes of Grindelwald*(2018)はCGなどのように、主に略称を用いる。
- 2 本来なら‘house-elf’は「屋敷妖精」と訳されるが、松岡訳では「屋敷しもべ妖精」となっている。この理由に、house-elfの奴隷的労働が「しもべ」という語の挿入で強調され、魔法界のhouse-elfの労働問題が浮き彫りになることが挙げられる。その点を考慮し、‘house-elf’の訳は本稿も松岡訳に準ずることとする。
- 3 参考文献は、本文中では基本的に著者の名字と該当箇所のみ括弧内で示す。
- 4 小鬼も「ヒトたる存在」だが、菱田は小鬼の自らの地位に対する考え方が屋敷しもべ妖精とは異なると指摘している(菱田、62-63)。また、魔法使いの支配下に置かれることを拒み、己の地位向上を目論む小鬼のことを、屋敷しもべ妖精のウィンキーが軽蔑する様子も考慮し(GF, 111-12)、屋敷しもべ妖精と小鬼は根本的に異なる存在として解釈する。
- 5 ケンタウルスは高い知性を持ち、ヒトの言葉を話す、ケンタウルス自身の要求によって「ヒトたる存在」ではなく「動物」として分類されている。(Rowling, *Fantastic Beasts & Where to Find Them*, xxiii, Introduction)
- 6 1 ガリオンは約5ポンド(寺島、108)。
- 7 安心毛布は「ライナスの毛布」(Linus' blanket)とも呼ばれる。これはチャールズ・M・シュルツ(Charles M. Schulz, 1922-2000)のマンガ作品『ピーナッツ』(*Peanuts*, 1950-2000)に登場する少年、ライナス・ヴァン・ペルト(Linus Van Pelt)が、常に毛布を持ち歩く姿が

由来となっている。廣淵升彦は、ライナスが指をおしゃぶりし、小汚い毛布を引きずって歩く様子から、彼の精神面に幼児期の癖が残っていることを指摘している（廣淵、127）。

## 参考文献

- Bergstrom, Signe, *The Archive of Magic: Film Wizardry of Fantastic Beasts: The Crimes of Grindelwald*. London: HarperCollins Publishers, 2018.
- Carey, Bryccchan, “Hermione and the House-Elves Revisited: J. K. Rowling, Antislavery Campaigning, and the Politics of Potter.” in Giselle Liza Anatol, ed. *Reading Harry Potter Again: New Critical Essays*. New York: Praeger Publishers, 2009, pp. 159-73.
- Rowling, J. K., *Harry Potter and the Chamber of Secrets*. London: Bloomsbury Publishing, 1998.
- , *Harry Potter and the Goblet of Fire*. London: Bloomsbury Publishing, 2000.
- , *Fantastic Beasts & Where to Find Them*. London: Bloomsbury Publishing, 2001.
- , *Harry Potter and the Order of the Phoenix*. London: Bloomsbury Publishing, 2003.
- , *Harry Potter and the Half-Blood Prince*. London: Bloomsbury Publishing, 2005.
- , *Harry Potter and the Deathly Hallows*. London: Bloomsbury Publishing, 2007.
- , *Fantastic Beasts and Where to Find Them: The Original Screen Play*. London: Little, Brown, 2016.
- , *Fantastic Beasts: The Crimes of Grindelwald The Original Screenplay*. London: Little, Brown, 2018.
- 板倉徹一郎『大学で読むハリー・ポッター』松柏社、2012年。
- グレゴリー、P 卿、渋谷幸雄訳『邪悪の石:本当は恐ろしいハリー・ポッター』同朋社、2002年。
- 小谷真理『ハリー・ポッターをばっちり読み解く7つの鍵』平凡社、2002年。
- 坂田薫子「ハリー・ポッターのイギリス(2) —『ハリー・ポッター』と現代イギリス社会における階級問題と政治」日本女子大学英語英文学会『日本女子大学英米文学研究 50』、2015年、71-89頁。
- 伊達桃子「《論説》ファンタジーの新しい波 —『ハリー・ポッター』は何をもたらしたのか—」神戸大学社会学研究会『社会学雑誌』創刊号、2009年3月、149-70頁。
- チータム、ドミニク、小林章夫訳『成長するハリー・ポッター 日本語ではわからない秘密』洋泉社、2005年。
- 寺島久美子『ハリー・ポッター大辞典 II 1巻から7巻までを読むために』原書房、2008年。
- 菱田信彦「従順なエルフと抵抗するゴブリン - 「ハリー・ポッター」シリーズの魔法種族における価値の逆転 - 」東京女子大学比較文化研究所『東京女子大学比較文化研究所紀要

78』2017年、59-76頁。

廣淵升彦『スヌーピーたちのアメリカ』新潮社、1996年。

三浦玲一「選択と新自由主義と多文化主義——グローバル化時代の文学としての『ハリー・ポッター』シリーズ」日本英文学会『英文学研究 88』、2011年、33-47頁。

インターネット資料

CBBC News, “Edinburgh “cub reporter” press conference, *ITV*, 16 July 2005”, 18 July, 2005, [http://news.bbc.co.uk/cbbcnews/hi/newsid\\_4690000/newsid\\_4690800/4690885.stm](http://news.bbc.co.uk/cbbcnews/hi/newsid_4690000/newsid_4690800/4690885.stm) (2021年1月22日閲覧)